最優秀賞受賞にあたって

神奈川県愛川町立中津第二小学校
菊池 崇徳（きくち たかのり）

この度はこのような素晴らしい席を設けてくださりありがとうございました。また、審査してくださいました先生方、東京書籍各部署の皆様には改めてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

先ほど露木先生から、本実践の取り組みについてお話をいただきましたが、この場をお借りして少し裏話をさせていただこうかと思います。

これは平成29年度、当時5年生だった子どもたちと共に行った実践だったのですが、本当に真面目で、何事も一生懸命、言われたことをきちんと成し遂げる素晴らしい子たちだな、というのが最初の印象でした。ただ、言われたことはきちんとやるけれども、もう一歩、なにか独創性に欠けるといったようなことが見えてきました。なにか新しいことにチャレンジしようとか、イノベーションを起こそうといった場合に、人の目を気にしてしまう、または面倒くさがってしまう。大人の世界でもこういったことがありませんか。私がまさにその一人なのですが。

そんな中で、子どもたち一人一人、誰でもどんなことでも思ったことを表現していいという協働的な雰囲気の中で、仲よく、そして全員で一つのものをつくりあげる、そんな場をつくることができたらいいなという願いが、この研究実践を始めるきっかけでした。

この実践を通して、子どもたちに学んでほしいと思ったことが三つありました。

その一つは対話です。『心理的安全性』を感じられる意見表出の方法や場を教師が整えることで、「あの子、すごいいい意見をもってるじゃん」といったような、非常に共感的な雰囲気が生まれてきました。

二つ目は、外部人材の協力です。できそうもないこと、「不可能じゃない?」と思うことでも、外部人材のご協力を仰ぐことで「不可能じゃないね。協力すればできるんだね」ということを実感することができました。また、実際に実現した時には、子どもたちの自信にもつながっていきました。

三つ目は、先ほど赤堀先生からもお話がありましたとおり、ICT機器の活用です。iPodがなければ、この授業は成立しませんでした。また、パソコンがなければ、子どもの鼻唄を録音したとおりに音階にすることもできませんでした。コンピュータでは自在に音程を変えることができます。おそらく30年前だったらできなかったことが、いまはできるようになり、さらに今後10年後、もしくはもっと早ければ5年後には、新たなイノベーションが起きることで授業の内容ももっと変わっていくのではないかという実感がありました。

この賞をいただくにあたり、私の研究実践をここまで支えてくださいました先生方、特に校長先生、そして中津第二小学校の職員の皆さん、そして今回の受賞を心から喜んでくれた父、母、そして家族、すべての人々に、感謝申し上げたいと思います。